



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

June 30, 2008, No. 24

【役員名簿 (2006-2008)】

代表: 生田省悟 (金沢大学)
 副代表: 高橋 勤 (九州大学)
 顧問: 上遠恵子
 事務局長: 小谷一明 (県立新潟女子短期大学)
 事務局補佐: 岩政伸治 (白百合女子大学)
 豊里真弓 (札幌大学)
 会計: 高橋綾子 (長岡技術科学大学)
 辻和彦 (福井大学)
 監事: 西村頼男 (阪南大学)
 ニュースレター編集委員:
 村上清敏 (金沢大学)
 林直生 (滋賀大学)
 山城 新 (琉球大学)
 会誌編集委員:
 太田雅孝 (大東文化大学)
 野田研一 (立教大学)
 高橋昌子 (三重大学)
 パトリシア・ライオンズ (愛媛大学)
 山里勝己 (琉球大学)
 コンピューターセンター:
 岩政伸治 (白百合女子大学)
 北国伸隆 (菽光塩学院)
 山城 新
 評議員:
 池田志郎 (熊本大学)
 石幡直樹 (東北大学)
 伊藤詔子 (松山大学)
 上岡克己 (高知大学)
 関口敬二 (大阪府立大学)
 高田賢一 (青山学院大学)
 巽孝之 (慶応義塾大学)
 三浦笙子 (東京海洋大学)
 吉田美津 (松山大学)

研究助成:

稲本 正 (オークヴィレッジ)
 岡島成行 (日本環境フォーラム)
 生田省悟 (代表)
 高橋 勤 (副代表)

自らの言葉で語る——再び——

代表 生田省悟 (金沢大学)

梅雨どき。この季節になると懐かしく思い出す言葉がある。はるか昔、金沢に来た早々のことだ。当時の職場があった金沢城跡と兼六園がそれこそ桜の雲に包まれてしまうのに大感激。某名誉教授に「桜がきれいで、金沢ってすばらしいですね」と申し上げたところ、間髪入れずに「君、梅雨どきの味わいがわからなきや、金沢を知ったことにはならんよ」。そのときは、何て底意地の悪い、これが百万石の驕りってやつかいと、いささかムツとしたのだが、今となれば、まさしくその通りと納得がゆく。雨に濡れて光る黒瓦の家並とタイサンボクの花、霧に煙って暗くしんとした森。それに、くだんの名誉教授はご存じなかったろうが、一瞬の晴れ間にきらめく赤や金や緑や青の小さな蝶たち。私が体感した、金沢ならではの梅雨どきの味わいである。

昨今、こうした心にしみる言葉に接したことがどれほどあるか。あれこれ賑やかな言葉がかすめ飛ぶのを身を縮こめてかわすばかりのような気がする。むなしい言葉の最たるものは、「2050年までに温暖化ガス排出を60~80パーセント削減する」との威勢の良すぎる誰かの発言か。他にも、生業に引きつけるなら、自発的な課題解決能力だとか自己決定だとか、煩わしいことこの上ない。というわけで、他愛のないことばかり呟きながら無為の時間を過ごしている。

そうはいっても、気になってならない言葉に出会う機会がないというものでもない。この学会関連の場面でも、たとえば先年亡くなられたある会員が言われた「定在感覚」は、私にとってかけがえのない言葉になっている。そして近いところでは、「場所を生きる」。個人名をあげて恐縮だが、山里勝己氏のご本のタイトルである。氏は同年輩ですら凍りつくほどのオヤジギャグを平然と放つ御仁。ところが、「場所を生きる」には正直、脱帽するほかはなかった。凡人に思いつくのはせいぜいで「場所に生きる」程度。おそらくは、長年のスナイダー研究のみならず沖縄という場所を自覚的に見すえて生きる日常から行きついたのであろう。この端正な言葉からは、凜とした決意を明確に読み取ることができる。つついこれを拝借したいとの誘惑に駆られる一方、否、私自身の言葉を織りなす営みをおろそかにしてはならぬと自戒してもいる次第である。自らの言葉で語る—この困難な課題に挑戦し続けるとは、代表就任に際して述べたものだが、その思いは今も変わっていない。

ところで、私の周囲は法律屋だらけ。そうした毎日で得られた、言葉をめぐるちょっといい話を二つばかり紹介したい。まず、数ある法律のなかでもガチガチと評される分野の若手教員が、あるところでこんなことを書いている。

言葉をどう使うかは、その人の事実に対するものの見方と密接に関係します。実態から離れた言葉は、単なる記号であり、決して私達の心をとらえることはありません。いや、それどころか、虚像を表す言葉として、私達の考えを誤った方向に導いてしまう危険すらあります。事実の洞察に裏付けられた《言葉に対する鋭敏な感覚》を、私達は常日頃から磨いておかなければなりません。

いかにもという感じはするものの、噛みしめ、味わうに値する文章である。かと思えば、「蝶多忙（忙しくて蝶が目の前を飛ぶようになってしまうさま）でしょうが」とメールで、しかも注釈つきで茶化してくる輩がいる。虫好き高年者としては看過できないとばかり、不正確な文言は法律家の恥、「眼前に無数の蝶が飛び交い、何をどうしてよいかかわからずオタオタするさま」と修正を申し渡したのはいうまでもない。いずれにしても、言葉を扱うという点では同じだが、まったく異質な堅い世界の住人と思いがちな同僚がときには真摯に言葉を考え、ときには軽やかに遊ぶ。こうした連中との付き合いもなかなか宜しいものではある、ということだ。

さて10月の全国大会は、高橋勤氏のご尽力により、阿蘇を望める久住高原で開催される。会員のみなさんとの再会、胸をうつ言葉、そして軽やかな対話が心待ちにされてならない。万障お繰り合わせの上、ご参加いただければ幸いである。

動物物語の面白さと怖さ

高田賢一（青山学院大学）

動物物語を読むということは何を意味するのだろうか。従来の動物物語の多くは擬人化が施され、動物たちは人間の言葉を話し、直立して歩行し、衣服を着ている。時計さえ持っていたりする。これらは動物のぬいぐるみを着た人間の物語を生み、動物を人間に理解可能な存在として捉えようとする点で、人間中心主義の発想に基づく物語形態といえる。これは、19世紀後半の“nature fakers”論争の根源にある問題だろう。この種の物語の最大のメリットは、人間を主人公とすると不都合、不自然なことが、動物に仮託して描けば許される、客観視できるということではないだろうか。これまで動物物語の多くは、少し毒を含んだ一種のファンタジーとして提示されてきたといってもよい。動物を主人公とするこのような語り方が物語と現実との間に距離を生み、笑いながら読むことを可能とした。動物を通して人間の本質を露呈させる意図も働いていたかも知れない。残念というか当然というべきか、このようなタイプの動物物語は現代では減少し、絶滅の危惧さえある。たとえ言葉を話すとしても、動物本来の姿が前面に出てくるようになったからだ。

イソップ以来の寓意的動物物語は衰退の道をたどり、やがて進化論と自然主義の浸透を背景として、知的かつ理性的であるべき人間の中の動物性をあぶり出し、万物の頂点からの転落に貢献するようになる。アルド・レオポルドが提案したように、人間が動物の立場に立って考え、「自然の権利、動物の権利」を口にすることもできる。だが、人間が動物と同じように考えることは不可能なことだ。人間は支配する動物であるため、他の生き物や弱者への想像力が大きく欠落しているといわざるを得ないからだ。その欠落した想像力を観察によって埋め合わせようとするのが、博物学、生態学、そして文学だが、文学以外の分野では脱人間中心主義の考え方が浸透しつつあるのに対して、児童文学を含む文学の世界では、創作も批評も旧態依然たる人間中心主義が支配的である。それを乗り越えようとする文学とその研究、エコクリティシズムは文学研究の支流というのが現状である。

環境文学の立場から木村裕一文、あべ弘士絵の『あらしのよるに』シリーズを読み、大いに笑い、多少のスリルを味わった後、考えてみる。するとこの絵本が、動物物語の可能性を考えるための格好のモデルとして位置づけられるし、動物物語の現代的意義についても多くの考える素材を提供してくれていると気づく。結論さ

え含んでいるといってもよい。これまで、この絵本シリーズをめぐって提示された解釈は多様である。友情、恋愛から国家、民族、宗教間の対立と和解、個人と集団の葛藤と離反、あるいは現代という不信の時代に天敵同士が信じ合おうとする姿に注目するものまで、実に多様である。この絵本は「食う一食われる」関係にある山羊と狼という異なる種類の動物間、つまり異文化間に友情が芽生える物語でもある。さらに山羊のメイはメス、狼のガブはオスであるため、友情物語は愛の物語へと発展する可能性を秘めている。さらにまた、二匹がいつも待ち合わせをする場所が仲間から遠い所、つまり、それぞれが所属すべき世界の境界を越えた場所だという要素を列挙すれば、そこから動物物語が孕み持つ現代的意味と可能性が浮上する。現実を越境する力、現実と異なる別世界の創造、その世界での動物の仮面をかぶった人間と人間との新たな関係の提示という可能性である。この絵本の斬新さとは、動物を人間の単なる鏡とする擬人化の発想からの脱却、動物は他者であるという想像力の深まりが見られる点にあるだろう。人種や性差や階級の葛藤への自覚が比較的乏しい日本にあって、例えば木村裕一という絵本作家が、世界に通じる現代の大きな課題と向き合っているのである。

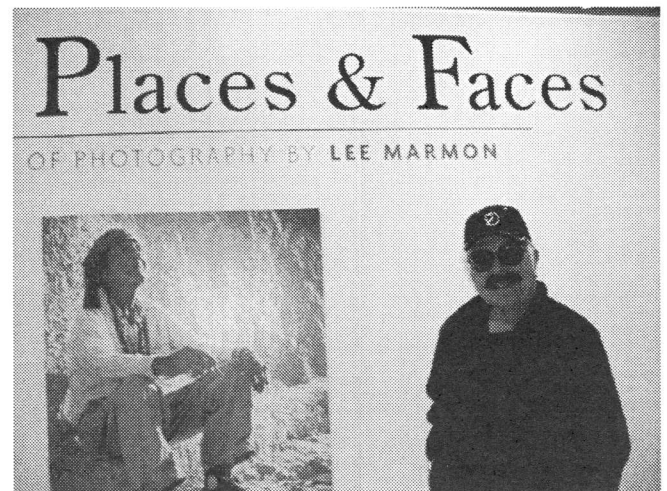
木村裕一に導かれ、自然と子ども・人間という観点からボームの『オズの魔法使い』(1900)、マックロスキーの『かもさんおとおり』(1941)や『サリーのこけももつみ』(1948)、エッツの『わたしとあそんで』(1955)といった絵本、あるいはオデルの『青いイルカの島』(1960)を再読する。するとその時、人間と自然環境との新たな関係という現代の課題がすでに先取りされた新しい物語世界が見えてくるのではないだろうか。動物物語は、現代批評の焦点である人種、性差、階級、そして自然環境を問い直すジャンルとしても機能するばかりか、子どもと大人たちに社会の多様な問題と出会う場を提供していることが明らかとなる。児童文学は子どもという未来に語りかける文学だと考えているが、すでにその分野にこのような現代の課題を提起しようとする作品が登場していたのである。

リー・マーモンの60年 先住民写真家の記録したプエブロの暮らしと世界観

茅野佳子 (明星大学)
写真提供：リー・マーモン

米国ニューメキシコ州北西部に、ラグーナと呼ばれる先住民の保留地がある。スペイン領、メキシコ領を経て19世紀半ばにアメリカの領土になったこの地域には、多くの先住民がアドーベ(日干しレンガ)の家を作り定住していたので、スペイン語で「プエブロ(共同体、村)」と呼ばれるようになった。リオグランデ河上流からアリゾナ州境にかけて広がる乾燥した高原に、19のプエブロ民族の保留地があり、ラグーナはその一つである。隣接するアコマ・プエブロの保留地内の文化センターでは、2008年12月まで、ラグーナ出身の写真家リー・マーモン(Lee Marmon 1925)の写真展「プエブロの場所と人々」(Pueblo Places & Faces)が開かれている。研究員としてアルバカーキに滞在中、マーモン夫妻と親交を深め、写真にまつわるいろいろな話を聞かせてもらった。写真とともに紹介したい。

マーモンの写真歴は子どもの頃にまでさかのぼる。家の近くでトラックの横転事故があり、11歳のマーモンの撮った写真を保険会社が4ドルで買い取ったというエピソードが残っている。幼少年期、白人との混血で青い目をもつマーモンに、部族のお年寄りとは分け隔てなくやさしかったという。大地を駆け



リー・マーモン (茅野佳子撮影/アコマ文化センターの展示会場
2008年3月16日)

回って幼少年期を過ごした後、アルバカーキにある政府のインディアン学校で軍隊並みの訓練や職業訓練を受けた。インディアン総務局による同化政策で、子どもたちは学校で部族の言葉や伝統を否定され、手に職をつけるよう訓練されたのだった。学校がいやで兄と逃げ出してばかりいたので、二人はグランツにある公立高校に移され、そこで様々な民族的背景をもつ移民の子どもたちといっしょに勉強することになった。

本格的に写真を撮り始めたのは、第二次世界対戦中に徴兵され、3年ほど駐留していたアラスカからラグーナに戻ったあとのことだった。政府の対インディアン政策と押し寄せるアメリカ文化の影響の下で、保留地の生活は大きく変容していたが、伝統的な暮らしや儀式は根強く残っていた。父親の食料雑貨店で働きながら、時間を見つけてはカメラを抱えて外に飛び出し、配達の際はトラックにカメラを積んでいたという。ひなたぼっこしている老人に声をかけ、撮影許可をもらおうと急いでカメラを取ってきて、老人の穏やかで威厳ある表情をとらえていった。マーモンの写真には、大地に根ざしたラグーナの人々の暮らしぶりが生き生きと写し出されている。

とうもろこしの皮むきの様子、壁塗りのための土をこねる女たちの姿、羊の群れの番をする老人。アドーベの教会や家、ダイナミックに動き続ける雲、光と影の描き出す大地。お祭りの日の踊りや集まった人々の姿からは、神聖な空気と興奮が伝わってくる。

これまでに撮った写真は5万5千枚を越えるという。2002年に出版された写真集『プエブロ・イマジネーション』(Pueblo Imagination)の表紙を飾ったのは、1954年撮影の「ホワイトマンズ・モカシズ」(White Man's Moccasins)で、マーモンの代表作となった。伝統的なヘッド・バンドやトルコ石の装身具を粹に身につけた老人が、陽のあたる外壁にもたれて腰をおろし、気持ち良さそうに煙草を吸っているのだが、よく見ると伝統的な靴モカシンではなくスニーカーを履いている。なかなか写真を撮らせてくれなかったジェフ老人が、マーモンの差し出したタバコと交換に撮らせてくれた貴重な1枚である。



写真(2)



写真(1)

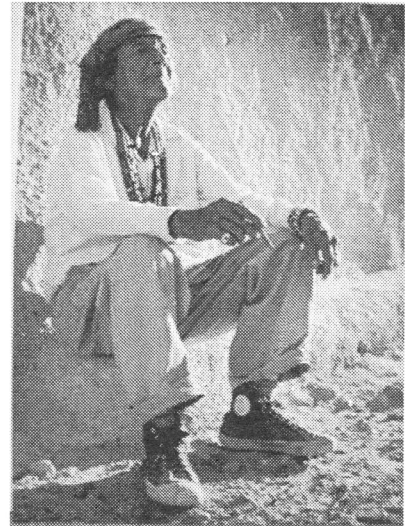
お祭りの時の動物の踊り(バッファローの踊り、鹿の踊り、鷲の踊り等)の写真も印象的だ。プエブロの人々は、大地を「母」、天空を「父」と崇め、すべてのものはつながっていると考える。写真集の序文で娘のレスリー・M・シルコーが解説しているように、死者は雨雲となって戻ってきて、その豊かな愛情を注ぎかけてくれる。大地に長くとどまる雪は、先祖がもたらしてくれる特に神聖な贈り物である。こうしたつながりを確認し、感謝と祈りを捧げるために、お祭りのときには心をこめて踊る。マーモンの写真は、踊り手の身につけている衣装や道具の細部にもプエブロの世界観が表現されていることを伝えているという。そして、長い抑圧の歴史の中で密かに守られてきた伝統的な踊りは、若者や子どもたちに受け継がれている。

ラグーナのお祭りは春と夏の2回行われ、数回訪れる機会があった。どのプエブロにも古いカトリックの伝道教会があり、お祭りはそこでのミサで始まる。ラグーナのお祭りの日

のミサは、すべて部族の言葉ケレス語で行われ、多くのお年寄りが参列していた。現在の教会には、18世紀初頭に最初の教会が建てられたときの祭壇が残っていて、漆喰の壁にはラグーナ独自の模様が描かれている。ミサが終わると、守護神聖ヨセフの像をプラザ(広場)に作られた祭壇に運び、そこで一日中踊りが続く。19のプエブロの代表が自分たちで創設し、企画・運営しているアルバカーキ市内のインディアン・プエブロ文化センターでは、週末にいろいろなプエブロの踊り手を招き踊りを公開している。展示室では常に趣向を凝らした展示が公開されているが、マーモンは創設前の準備段階から写真展示の責任者を務めたようだ。

1967年からカリフォルニア州パームスプリングズに拠点を移し、ボブ・ホープ・ショーの公認写真家として仕事をしてきたマーモンは、その間も定期的にラグーナを訪れて保留地の写真を撮り続け、82年にラグーナにもどった。92年、コロムブスの「アメリカ大陸発見」500年を祝うイベントが全米で行われようとしていたときに、プエブロのアーティストや研究者たちが白人の視点から語られてきた歴史を書きかえようと、ドキュメンタリー映画「コロムブスを生き抜いて」を制作したが、その中でもマーモンの写真が多く使われている。2006年には、南西部インディアン芸術協会から、先住民の芸術の振興に大きく貢献したとして「ライフタイム・アチーブメント賞」を贈られた。

19世紀末から20世紀初頭にかけて「滅びゆく民族」として研究や記録の対象となった先住民は、文化人類学者や作家や写真家によって一方的に「表象」されてきた。被写体となった人々は、挑むような目でカメラを見つめ返していることが多い。しかし彼らは決して「滅びゆく民族」ではなかった。マーモンの残した膨大な数の写真は、メディアの報道や映像からは見えてこない、アメリカの「辺境の地」で過酷な歴史を生き抜いてきた人々の力強い文化と大地に根ざした世界観、そしてそれを生み出し支えてきた大地の姿を伝えている。歴史の残した問題は根深く、新たな問題も数多く生じているが、グローバル化し画一化していく世界の中で、プエブロの人々は、力強く柔軟に伝統の中に現代の生活を取り込み、動き続けているのだということがわかる。



写真(3)

写真 リー・マーモン撮影：(1) “Laguna Eagle Dancers” (1962) (2) “Laguna Buffalo Dancer” (1952) (3) “White Man’s Moccasins” (1954)

米国長期研修～ブルージェイとの再会

喜納 育江 (琉球大学)

サンフランシスコ湾地域(いわゆるベイエリア)は、一年を通して春か秋を思わせる穏やかな気候である。冬は冷たい雨が毎日のように土を浸す雨季だが、それが終わって再び陽の照る3月になると、木の枝から、地面から、植物が勢いよく芽吹きだす。春のバークレーは、水仙、フリージア、バラ、ツツジ、モクレンなど、次々に咲く多様な花々が放つ芳香と、やわらかく降り注ぐ陽の光のぬくもりに包まれている。

この季節、家から大学の研究室へと向かう20分は心地よい散歩になる。キャンパスの中にあるレッドウッドの森を歩いていくと、向こう側に雲ひとつない真っ青な空が次第にひらけてくる。まぶしい。ああ、空はこんなに青かったのだなあと思ったりする。と、その時、深緑の低木の藪に、空の色の何倍も濃く鮮やかな青色の何かが目に入り、思わず立ち止まった。ブルージェイだった。日本語名は「アオカケス」(だそうだ)。ブルージェイは私など眼中にないらしく、逃げようともしない。「久しぶりだねえ」と声をかけてみたが、鳥に通じるわけではない。そのうち



鳥は藪の中へ姿を消してしまった。

本当に久しぶりだった。私が最後にブルージェイに会ったのは、もう16年前、大学院留学生のときだった。場所はヨセミテ国立公園の中。そのときも、目にした瞬間はその唐突な瑠璃色に息をのんだ。肉眼でこんなにまばゆい青色をした鳥を見たのは初めてだったのである。鳥の鮮やかさは衝撃的だ。留学先のペンシルベニアでは、家の庭に降りてきた深紅のカーディナルにやはり目を奪われた。そういえばエミリー・ディキンソンもこんなふうに出くわして思わず息をのんだことを詩に書いていた。小鳥に出会っただけで固まってしまうなんて、ディキンソンって変な人だよなあ、とあの頃は思っていた。

その後、Ph. D. 課程の授業でマキシム・クミンの「言葉 (The Word)」(1994) という詩に出合ったとき、ディキンソンのことや、ブルージェイのことを思い出した。この詩の語り手が林の中のトラックで乗馬をしていると、目の前にフェンスを飛び越えて大きな雌シカが現れる。突然の雌シカの荘厳な姿に「私」が「馬」との間で交わっていた夢想は中断され、トラックを囲む森も、リスたちも息をひそめる。空気の流れも時の流れも止めて、雌シカは語り手の目前を通過する。そしてこう続く。「戻って来て！私は彼女にそう言いたい／傷つけたりしないから。戻ってきて、そして／静止する時の中でトラックに釘付けになっている私たちに見せて／あなたが直立の姿勢から駆け出し、飛び越えてゆけるところを。／私たちも、あなたの心臓が逸るのといっしょに鼓動を逸らせているから」。

「私」には雌シカに伝えたいと思うことが色々ある。毎朝バードフィーダーに餌を入れるとき、様々な小鳥がやって来て、しばらくは自分の身体を止まり木代わりに留ることだってあるのだということ。そしてキツネたちのこと——「ふもとの草原を馬に乗って通るとき、／馬の匂いに身を隠した私に、雌ギツネが／子ギツネたちをどんなふうにも教育するかも見せてくれるのだよ。／母ギツネの指示で穴に潜った子ギツネたちが／どうやって違う穴から出てくるかを。／雌ギツネの言葉——私が探し求めている言葉」。ディキンソンも、小鳥との関りを求め、小鳥の言葉を探していたのかもしれない。クミンと比べると慎重で不器用な歩み寄り方だけだった。

あの頃から12年。私は再びアメリカで暮らしている。年も取ったし、あの頃よりはディキンソンの繊細さも理解できるようになったはずだ。しかし、そんな思い上がりも束の間だった。ブルージェイに再会した日、考えてみると私はブルージェイの生態をよく知らないと思い、インターネットで検索してみた。ところが、インターネット上に出てきたブルージェイの写真は、私が「ブルージェイ」として知っているあの鳥ではなかったのだ。生息地域もアメリカの東部、とある。何か違う。よくよく調べていくと、あの「ブルージェイ」は、実は「ステラージェイ (Steller's jay)」という種のカケスであることがわかった。1741年にこの鳥に遭遇したドイツの研究者の Georg Wilhelm Steller にちなんでこの名がついたらしい。ブルージェイとは異なり、アメリカ西部に生息し、頭部が黒っぽく、黒いトサカがあるのが特徴だそうだ。

知ったかぶりをしてとんだ鳥違いをしてしまった。今度会ったら謝ってみよう。だが、そんなことを伝えたい人間など、「変な奴だよなあ」と思われるのがオチで、あの鳥の視界にさえ入らないだろう。そもそも、まさか人間が自分に名前をつけているなど、あの鳥は知らないだろうし、名前など何の意味も成さないはずだ。息をのむような出会いに心を満たされながら外を歩く——人間にはそれしかできないのかもしれないし、それでいいのかもしれない。

バイエルンの森・ボヘミアの森

松岡幸司 (信州大学)

「さあ、ちょっと休もう」

祖父は…ステッキを掲げて、私たちがのぼってきた方向にある大きな山なみを指して尋ねた。

「あそこにあるのは何か、言えるかな？」

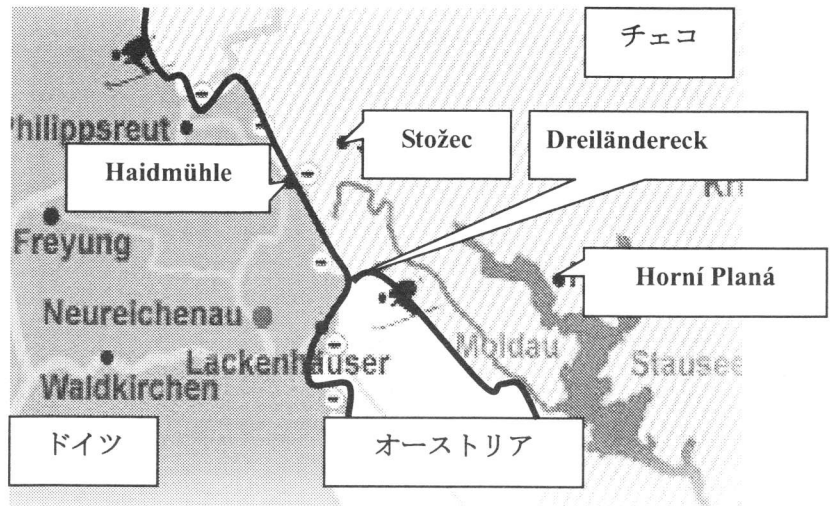
「うん、おじいちゃん」

...

「あれは、暗くて深い湖のあるゼー^{ヴァルト} 森 だよ」
 「ゼー^{ヴァルト} 森 のもっと右は？」
 「あれは、ブロッケンシュタイン^{ベルク} 山 とゼッセル^{ヴァルト} 森」
 「そのまた右は？」
 「あれはトゥセット^{ヴァルト} 森 さ」

(シュティフター「みかげ石」より¹⁾)

Dreiländereck (3 国の角[かど])。そこはドイツ・オーストリア・チェコの国境が一つになる場所。ドイツ側では「バイエルンの森 Bayerischer Wald」、チェコ・オーストリア側では「ボヘミアの森 Böhmer Wald」と呼ばれる、広大な森の中だ。国境の山から眺める森は切れ目無く続き、森の境界などわかるはずもない。この森の泉に源を持ち、ボヘミアの森をぬって流れ、プラハでエルベ川に注ぎ、はてはハンブルクで北海まで続くのが、クラシック音楽のスタンダードになっている「モルダウ」川である。冷戦時代には、モルダウからオーストリア・ドイツの国境線までは、「緩衝地帯」として住民は追い出され、地図



上では何も存在しない「真っ白」な地域とされていた。現在は、冷戦時代に電力確保のために造成されたダムによって大きなダム湖が広がっているが、1805年、その湖のほりにある小さな村オーベルプラーン (チェコ名: Horní Planá) に生まれたのが、作家シュティフター (Adalbert Stifter) である。彼の代表作である短編集『石さまざま (Bunte Steine)』の第1作「みかげ石 (“Granit”)」は、このオーベルプラーンの村を舞台としており、上記の引用は、村はずれからちょうど Dreiländereck の方角を見た部分である。

ここにはいくつかの森の名前が出ているが、これらは全て「ボヘミアの森」の一部をなすものである。一口に「森」と言っても、いわば森林地帯を表しており、森と草原や畑地が繰り返し現われる景色となっている。筆者は、この「森」を何度か訪ね、シュティフターの描いた森を歩き回っているのだが、今年の3月に短期語学留学の学生引率でドイツに行った際にも、空いた時間を見つけて国境近くの村の定宿に5日ほど泊り森を歩いてきた。この「森を歩く=Wanderung」という習慣は、多くのドイツ人にとっては比較的日常的な行為であり、週末や夏のバカンスで森に行き歩き回ることも珍しくない。今回の目的は、昨年冬にレーゲンスブルクで手に入れた一冊の本に出てくる森の中の礼拝堂を訪ねること



にあった。Roman Kozák というチェコ人の書いたという、ボヘミアの森に伝わる言い伝えや物語を集めた短編集²⁾の第3作“Von der wundertätigen Quelle bei Tusset (トゥセットにある奇跡の泉)”に出てくる礼拝堂である。

「幼い頃から盲目であった男が、目が見えるようになる術を探して放浪を続けた結果、ボヘミアのはずれトゥセット (チェコ名は Stožec) の山の崖から落ちた際に偶然奇跡の泉を発見し、目が見えるようになる。その後彼は泉守りとなり、その噂を聞いてはるばる訪ねてくる人々を迎えるべく建てられた礼拝堂の管理人となる」という、わずか8ページほどの物語だ。

2月24日の早朝、宿の主人フーベルトに国境の村ハイドミューレまで車で送ってもらい、国境までの2kmは自分の足で歩いた。2005年の夏に、オーベルプラーンに行くためにこの検問所を越えた際には、帰りに入念な(?)パスポートチェックのため30分ほど足止めをされたのだが、チェコがEUに加盟したためか、検問所はもぬけの殻になっていた。チェコ・スロヴァキアのビザを取ってプラハに入ったのが1992年の夏。半年後の93年の3月に取っ

たビザはチェコのものとなっていたことを考えると、感慨深いものがある。国境を越えた所にある Nové Údolí から一駅 4km だけおんぼろのローカル線に乗る。車内で払った乗車賃は 10 コルナ、日本円で 50 円ほどである。トゥセットの改築中の駅舎の横からモルダウを渡り、広い、枯れた草原をのんびりと歩いていく。途中で 2・3 のグループと会ったが、ドイツ語とチェコ語の挨拶が入り混じり、こちらから挨拶をする際の選択に困ってしまう。

たどりついた礼拝堂の前では、チェコ語を話す子ども達の集団が騒いでいる。どうやら遠足に来たようだ。礼拝堂は思いのほか新しかったが、説明書きによると、冷戦中に焼失したものを再建したものだそうだ。内部もきれいに整えてあり、現在も礼拝や祈祷に使われているようだった。お堂の横には「奇跡の泉」があったので顔と目を洗ってみる。遠くが見えるようになった気がするのには齢のせいだろうか...

礼拝堂の横の道を上がって行くと、主人公アンドレアスが落ちたという崖があった。駅や草原から見えていた山の上の岩がそれだった。さえぎるものなく「ボヘミアの森」から「バイエルンの森」を眺めることができる(写真左手前がトゥセットの集落、右奥はハイドゥミューレの村)。遠くに聞こえる鐘の音は、風によってきたハイ



ドミューレの教会の鐘、音にとって国境などは意味をなさず、やはり森には国境線も境界もない。時代の移り変わりと国境の意味に関してあらためて深く感じ入ったのは、やはり奇跡の泉のおかげだったのだろうか。

1) シュティフター: 『石さまざま (上・下)』 松籟社. (「みかげ石 (花崗岩)」は上巻)

2) Roman Kozák: *Das Moldauherz und andere Sagen und Geschichten aus dem Böhmerwald*. Sturz Verlag, 2006. Passau. (チェコ語からの翻訳)

Shinobazu Study Group に参加して

大野美砂 (東京海洋大学)

5月11日の日曜日、私は、Shinobazu Study Group という小さな研究会に参加した。この研究会は、東京文京区のブルース・アレン先生の御宅で月に一回程度開かれているもので、93年から94年にスコット・スロヴィック先生が日本に滞在されたときにスロヴィック先生を囲んで行われた読書会に始まり、その後14年間続いている。環境文学に関心をもつ人ならばだれでも参加することができ、大学院生から長い間環境文学を専門にしてきた研究者まで、気楽に集まり、お茶とお菓子をいただきながら作品を読み議論するという、楽しいが収穫の多い会だ。

毎回研究会は雑談から始まる。雑談といっても、ただのおしゃべりではない。メンバーが環境文学のこと、研究のことなどを自由に話し、意見を交わし、情報交換をする。今回は、アレン先生が3月に熊本で石牟礼道子についての講演を行ったことから、石牟礼道子の話になった。熊本では、医学、政治、法学、文学など、多方面から学際的に石牟礼文学へのアプローチがなされているなど、アレン先生から、熊本の石牟礼研究についての報告があった後、石牟礼文学の時間の構造、空間に対する感覚へと話が発展していった。近い将来、アレン先生による『天湖』の英訳が出版されるようである。環境をめぐる様々な文化圏からのメッセージを日本の読者に広範に伝えるために、外国の出版物の日本語訳が重要であることは言うまでもないが、環境問題がますますグローバル化していく中、水俣の問題、日本の環境文学を英語で世界に発信することも重要だと思う。この研究会では、メンバーはすべて英語で議論をしている。石牟礼文学が英訳される喜びを英語で語り合いながら、日本の環境文学を世界に発信する必要性を強く感じた。

様々なテーマについて自由に議論した後、作品を一つ読んでいる。作品はメンバーが順番に選ぶが、環境文学に属する作品に限らず、おもしろいと思ったものを持ち寄り、いろいろな作品を環境文学の視点を入れて読んでいる。今回は、オルハン・パムクという、ノーベル賞を受賞したトルコ人作家の『雪』の英訳の最初の2章を読んだ。この作品は、1990年代初頭のトルコ北東部の地方都市カルスを舞台にしたもので、主人公の42歳の詩人が、12年間の亡命生活の後、久しぶりにイスタンブールを訪れたときに、昔の友人の紹介で、カルスで最近起きた事件の取材をすることになるというものだ。政治小説としての側面を多くもち、イスラムの伝統的価値観と西の価値観の対比が様々な形で描かれていて、今日の世界情勢を予見したとして世界中で翻訳され、ベストセラーになった作品であるが、環境文学の視点を入れると、場所の感覚が読み込めることがわかる。トルコという場所が、主人公のアイデンティティを形成する重要な要素になっている。さらに、メンバーの一人、相原優子氏が紹介してくれたパムクの自伝的作品『イスタンブール—思い出とこの町』とともに検討すると、主人公とトルコとの関係が、作者自身の場所の感覚を示唆していることがわかる。一見、環境文学とかけ離れた内容をもつ作品が、環境文学の視点を入れることで、深みを増し、新しい解釈の可能性を切り拓くことを楽しむことができた。

私は、学生時代に一度この研究会に参加してから、すっかりご無沙汰をしていた。そんな私が受け入れられるのか、不安に感じながらアレン先生宅に向かった。研究会は、私の不安が滑稽に感じられるほど、温かい雰囲気、楽しい会だった。最近、文学研究の分野でも、大きな学会だけでなく、小さな研究会によって、研究のネットワークを構築しようという試みが多くなっていると思う。大きな学会では、一度に多くの研究成果を聞くことができるが、質疑応答の時間が限られていて、十分に議論ができないことも多い。それに対して、小さな研究会では、特定のテーマについて、ゆっくり議論を重ねることができる。今後、Shinobazu Study Groupがますます発展していくことを期待したいと思う。

第20回エコクリティシズム研究会(2008年春季)報告

伊藤詔子(松山大学)

エコクリティシズム研究会は、1994年6月、広島大学にスコット・スロヴィック教授が来学された折の講演会とセミナーに端を発している。その後当時としては最新のまた神秘的に包まれていたアメリカ文学の一ジャンルであったネイチャーライティングと環境文学、エコクリティシズムについて、学際志向の学生や、中四国・九州近隣の大学などに勤務する研究者の間で、急速に関心が高まり、定期的に研究会を持つようになった。テリー・T・ウィリアムスなど来広される作家や学者の講演をいただく機会も何度かあった。

翌年秋にASLE-Jが設立され、学会活動とともに、この研究会は年に2度くらい集まり続けていった。数年前にはASLE-Jの分科会ともなり、小さいながら継続は力なりと信じて続け、これまでに研究会のプロジェクトを中心に4冊の研究書と基本文献の翻訳書を出版できたことは、ASLE-Jの活動の一環としても、一応の研究成果といえるかもしれない。また特にエコクリティシズム研究を課題とする科研費や広島大学、広島国際学院大学、松山大学などが環境文学の研究組織化に協力的であり、研究費の面でお世話になっていることは有難い。

第20回の研究会が3月15日広島大学で開催され、今回は、ASLE-J生田代表が遠路をおはこびいただき、水俣学の一部をご講演いただいた。15年の研究会史の中でも特記すべきこととして残るだろう。水俣と広島は環境文学の原点であり、先生のお話は研究会の今後の指針のひとつとして胸に深くきざまれた。その他3つの発表の中には山口県でエコ音楽の活動でもしられる、福屋利信氏(宇部高専教授・ラジオ音楽番組プロデューサー&パーソナリティ)の「イーグルスとエコロジー—新アルバム「失われた森」を中心に」で、珍しいCDやDVDつき解説もあってボブ・ディランを中心に60年代音楽と環境主義の深いつながりについて教えられた。環境に関する限り地域性こそエコロジーの鍵なので、さまざまな地域活動や研究の場が必要なだけに、研究会の真の役割もこれからではないかと実感させられた。

この間予想を超える速度で文学と環境が膨大な領域に拡大してきて、各国(越境)文学、作品・作家研究、批評研究、日米関係、世界各国との関係、ASLE-Jの取り組んでいるアジアと日本、環境activism、環境保護・保全、環境思想、哲学、法学、経済、歴史、倫理またその教育などなど細分化を募らせていく中で、エコクリティシズム研究

会は、一貫して環境文学の名作を読み、またその批評を研究している。しかしいまや研究会も成年に達し、社会への発信の新しい形を考える時期に来ている。というのも1990年代から21世紀にかけて、環境概念には大きな変容が見られ、environmentalism そのものも変質してきた。戦争で苦しむ地域も多く、環境の捉え方は深刻さを増し平和との関連が深くなっている。多くの環境正義研究書が出版され、社会学との提携もいっそう深まってきた。主流の伝統的な文学も環境文学的言説を意識化し、いまや文学シーンに大きな変化を引き起こしている。

こうした動きと提携する形で、環境文学もエスニック文学と融合する形で新展開をみている。住む場所を基盤とする「国よりも都市」の発信機能が重要になっているなか、輪読形式の集まりやすい研究会での勉強は、意見交換と情報収集の場として、今後ともうまく機能していければと願っている。地域性を生かし、平和と環境文学という独自のアプローチから、大江健三郎もいう「広島学」の一端を、今後ともエコクリティシズム研究会は構築していきたい。

翻訳分科会 活動報告

野田研一（立教大学）

翻訳分科会は2005年度役員会において設置を承認されました。しかし、20名を超える方々のご参加をいただいたにもかかわらず、発起人である野田研一がその後、諸事多忙を極めましたために、実質的な活動がまったくできず、今日に至っております。まずはこの点、ご参加下さっている皆様に深くお詫び申し上げます。

そもそも翻訳分科会を立ち上げた趣旨は3点あります。①翻訳という共同作業の場を設けて、会員の相互交流を活性化すること。②若手研究者の方々が、今後、翻訳という仕事をその研究活動の一部とされる可能性が高く、そのための研鑽の場とすること。③エコクリティシズムや環境文学のジャンルでは、日々新し術語や語彙が登場しており、その適切な訳語を定めていく作業を進めること、です。

ネイチャーライティングや環境文学、あるいはエコクリティシズムといった分野の翻訳出版はかならずしも盛況というわけではありません。むしろ、90年代に一時的に盛り上がった勢いは失せ、現在は完全な低迷状態にあるとあってよいかと思えます。しかし、他方で、エコクリティシズム関係の論文や書籍は確実に増え続け、ASLE-Japan以外のところでもこうした研究を進める方々が増えています。

1990年代、ASLE-Japan 設立に前後して始まった日本の環境文学研究は、すでに10年を優に超える歴史を持っていますが、一方ではアメリカを中心とする諸外国の新しい研究からの刺戟も受けながら進められています。その意味では依然として「初期」的状況を完全に脱したとはいえませんが、それはけっして否定されるべきものでもありません。積極的に国や文化を越えた場所から届く情報を摂取しながら、みずからの理論を構築していく。これまでも、これからも、それこそが望ましい研究のあり方だと思えます。

このような「初期」的状況にあって重要な作業のひとつが、用語・術語の定訳の確立です。「初期」的状況であればこそ、こうした地道な作業の蓄積が今後の研究の何よりの礎となります。いま、私たちはnature writing の訳語として「ネイチャーライティング」を使用しています。しかし、90年代初期にはそもそも訳語がなく、たとえば「自然文学」と訳すことも可能であったでしょうし、「ネイチャー・ライティング」とカタカナでかつナカグロを間に挟んだ時期もありました。sense of place を「場所の感覚」と訳すことが慣習化したのも同様です。

ASLE-Japan は、いわば日本のエコクリティシズムないし環境文学研究を先導する学会として、これまで持続してきましたが、それは同時にこうした用語・術語の定訳ないし標準訳を提示する役割も担ってきました。もちろん、公的な見解としてそれを公表したわけではありませんが、さまざまな機会をとらえて、会員がこうした訳語の定着をめざして努力してきたことは間違いありません。

ある意味で、私たちは幸運かもしれません。この分野の研究の歴史の浅さのおかげで苦勞も少なくありませんが、同時に、このような「命名」の特権を享受できる立場にもあります。もっとも、それゆえにこそ、学会としての責任は重く、将来の研究のための礎を築く作業は、このような部面でも粛々と継続してゆく必要があります。

以上のような抱負とともに本分科会は立ち上がったのですが、その後の経緯は先述したとおりです。ただし、昨年8月に開催された日韓合同シンポジウムの際、「予稿集」が参加者に事前配布されたことをご記憶の方も少ないと思います。事前に発表内容は読んでおき、その上で当日は討論に集中することをめざしたこの「予稿集」には、日本、韓国、台湾、アメリカからの各参加者の発表論文が掲載されていました。じつは、これらの翻訳に活躍

したのが翻訳分科会のメンバーの方々です。多忙ななか、シンポジウム開催の日程が迫っているなか、メンバーの喜納育江さん（琉球大学）を中心に、若手メンバーが積極的に翻訳作業を進めて下さいました。

これは、本分科会としては初めての具体的活動であったわけですが、少なくともほんとうに必要なときに、学会活動を、目に見えない形で、しかし実質的に支える役割を果たしたといえます。このときに、ご尽力下さった分科会メンバーの方々の献身ぶりには頭が下がります。さらに、その一部は、国際シンポジウムの成果集である『「場所」の詩学——環境文学とは何か』（藤原書店刊）にも収録されています。

翻訳分科会の本格活動に向けて、新たな体制を構築しなければなりません、分科会の本来あるべき姿として、学会をサポートし、いざというときにきちんとした力となりうるような組織と活動内容をめざしたいと思います。とりわけ、国際学会に対する支援、ニューズレターや学会誌への翻訳掲載などに関して、分科会として学会全体を支える役割を果たしていきたいと考えております。

台湾での環境文学国際大会に参加して

結城正美（金沢大学）

5月23日～24日、港町・淡水にある台湾最大の私立大学、淡江大学で開催された「エコロジカル言説をめぐる国際大会」に参加した。ニューズレターでも何度か紹介されているこの大会は、今回で第4回目だとのこと。私は初めて参加したが、淡江大学のホスピタリティにより打ち解けた雰囲気の中、国内外のエコクリティシズムをめぐる最新の研究動向に触れ、充実した二日間を過ごした。

大会は、初回から招聘されているというパトリック・マーフィ氏（米国）の基調講演「テラカルチュレイション、政治的解体、無数の新たな方向づけ」で幕を開けた。続くセッションではジョニ・アダムソン氏（米国）をはじめとし、ドイツ、韓国、マレーシア、イタリア、日本からのゲストの発表がおこなわれた。二つのセッションが別会場で行われていたため、すべての報告を聞くことはできなかったけれども、質疑応答の時間をかなりたっぷり取っており、100名を越えるフロアから次々と質問やコメントが寄せられていた。

会場で和やかにお弁当を食べた後、ASLE-ANZ 代表ケイト・リグビー氏の基調講演「災厄を語る——環境災害をめぐる解釈学」で午後のプログラムが開始。主に台湾在住の研究者や大学院生の発表があった。同じ時間帯に「台湾原住民文学と生態論述」と題されたセッションがあり、大いに関心を引かれたが、中国語のみでの発表だと聞き（学部時代に中国語の授業は取ったのだけど…）、大学院生のセッションがおこなわれる会場へと向かった。淡江大学の大学院生による発表が4つあり、いずれもよく練られた議論が展開されていた。検討されて

いたのはカレン・テイ・ヤマシタ、リンダ・ホーガン、マーガレット・アトウッドの作品で、後で淡江大学の教員に訊いたところ、これらは集中講義でも取り上げられた作品だとのこと。この集中講義、国際的にかなり著名な環境文学研究者を招聘しておこなわれているようで、大学院生も相当鍛えられているようだった。

二日目のプログラムは、マイケル・ジーマーマン氏による基調講演「ポストヒューマニズムの終末論的ディスコース」で始まった。その後、台湾在住の研究者による発表が二会場でおこなわれ、続いて昼食時に ASLE-Taiwan の発足のアナウンス、そしてスコット・スロヴィック氏の講演——とプログラムにあるが、私は空港に向かうため残念ながら正午に会場を後にしなくてはならなかった。その後淡江大学の関係者に訊いたところ、ASLE-Taiwan 発足はしばしお預けになったとのこと。台湾の政権交代にともない諸々の手続きが遅れ、大会当日までに学会設立の認可がおりなかったそう。けれども、大会プログラムに世界各地の ASLE の代表からの祝辞が掲載されるなど、間もなく実現するであろう ASLE-Taiwan 設立を祝福するムードは大会の随所で感じられた。

創立メンバーは30～40人とのことで、中国語で書かれたエコクリティシズムのテキストの作成を含め、既にかかなり活発な動きがあるらしい。ASLE-Korea、ASLE-Japan それぞれの代表からの祝辞にも書かれていたが、ASLE-Taiwan の存在は、アジアにおける環境文学研究のハブの発展にとって大きな意味を持つにちがいない。

第4回淡江大学国際会議に参加して

山城 新（琉球大学）

2005年の前回大会から3年ぶりに開催された台湾・淡江大学の国際会議の今回のテーマは“Crisscrossing Word and World: Ecocriticism, Crisis, and Representation”。2008年5月23日から24日の日程で淡水河の近くの港町を見下ろす淡江大学で開催された。この報告では山城の参加したパネルの概要についてのみお伝えする。

淡江大学英文学教授のHan-ping Chiu氏の司会の下、Nicolas A. Kaldis (Binghamton University, USA)、Lili Song (Tsing Hua University, China)、山城（琉球大学）、そしてChung Tzu-I (University of Texas, El Paso, USA)の4人が発表を行った。

まず中国文学専門のKaldis氏の発表は“Steward of the Ineffable: ‘Anxiety-Reflex’ in/as the Nature Writing of Liu Kexiang (Or: Nature Writing Against Academic Colonization)”と題し、台湾の代表的ネイチャーライターのLiu Kexiang（2003年に沖縄で開催されたASLE-Japan国際会議に招待作家の一人）の詩について紹介し、中国文学におけるネイチャーライティング研究の意義と必要性を論じた。自然環境が破壊され、種が多様性を失う現代的な環境的危機の状況において、ネイチャーライティングはまさに消滅せんとする対象を記録する役割を果たしているが、私的言語を介した疑似的ノンフィクションとして、表現者の中に主体・客体の二項対立の相克をもたらす点において、西洋文明の合理的、科学的、客観的価値観を批判的に捉える契機を提示しているとする。Liu Kexiangの詩を例示しながら、伝統的中国文学研究はネイチャーライティングというジャンルをもっと精力的に研究すべきであると提言した。

中国の清華大学のLili Song氏の発表は“Ecocritical Historicity in Chinese Literature”と題し、中国文学史における環境文学の伝統を概観する主旨であった。Song氏よれば、環境文学研究の一つの傾向は、文化や自然と人間の間に調和の取れた関係を観る立場があることであるとし、そのような観点で文学史を再考する態度を「エコクリティカルな歴史性」（“ecocritical historicity”）とする。そうしたエコクリティカルな歴史性は、中国文学の中で、「無為自然」を唱えた荘子から現代中国環境作家まで様々にみることができると説明し、その過程を自然との「融合」、自然からの「乖

離」、そして産業化や現代化にともなう「離散（ディアスポラ）」への変化としてまとめた。

琉球大学の山城の発表は、海中体験をめぐるナラティブにみることのできるいくつかの特徴を、18世紀末アメリカのロバート・フルトン、19世紀のジュールヌ・ヴェルヌ、20世紀の原子力潜水艦艦長ウィリアム・アンダーソンらのナラティブをとおして分析した。山城の発表では、建国期から20世紀にいたるまで、アメリカの拡張主義は海中へ（下へ）も展開されていたことが指摘され、アメリカ文化を陸地や海上を西へ平面移動することで説明されてきたアメリカ西漸運動史の議論に新たな視点が示された。

テキサス大学エルパソ校のChung Tzu-Iの発表は、アメリカPBSが制作した*Frontier House*という番組の中に分析することのできる現代アメリカ人のフロンティア観とその願望、そして、テレビメディアが結果的に商品化する歴史と現代自然体験の問題点についてであった。この番組では、アメリカ人の三家族がフロンティア時代の生活を5ヶ月間そのまま実体験するという体裁で、期間中はあらゆる現代的生活の利便性からは隔離され、自給自足の生活の中で各家族が試行錯誤し、失敗を経験しながら成長するというストーリー仕立てのドキュメンタリーという設定で、かなりの高視聴率を獲得した人気番組だったそうである。しかしながら、番組の中では、フロンティア史の中にあつた様々な問題——人種・女性差別、自然破壊、文化継承——は単純化あるいは無視され、更に番組スポンサーが自然食品関連会社であること等から、結局は消費者主義的価値観にまみれた番組であるとして、発表者は痛烈に批判した。

本セッションの全体的な印象として、前回大会に比べると、アジア文学・文化研究領域において、エコクリティシズムの実践が更に多様化してきたように思えた。予稿集が二冊体裁（全体で約530ページ）になったことから、発表者の数が増えたことは明らかで、これから益々アジア諸国で環境文学研究が発展を続けることは間違いない。その動向は日本での今後の研究の方向性にも多く示唆があるはずである。いや、そのような国境づくりの閉鎖的な研究動向の見方もそろそろ時代錯誤なのかもしれないと思いを馳せた。

**2008 年度日本近代文学会春季大会
シンポジウム「〈環境〉の中の表象と心—近代文学再考—」(2008. 5. 25) 報告**

高橋龍夫 (専修大学)

2008年5月24・25日、東洋大学において、日本近代文学会春季大会が開催された。その中で2日目午後は、「〈環境〉の中の表象と心—近代文学再考—」というタイトルで、4人のパネリストを招き、〈環境〉をキーワードに日本近代文学研究への新たな視座を提起しようとするシンポジウムが行われた。前半は各30分のパネリストの発表、後半はフロアーを交えたディスカッションという形式で、13時に開始したシンポジウムは、休憩を挟んで17時40分にまで及んだ。

およそ、日本近代文学研究と〈環境〉との接点は、近年、大学や研究機関単位でその成果が僅かに散見される程度であって、学会全体で研究テーマとして取り上げられることは極めてまれなのが現状である。たまたま筆者が提起したシンポジウム企画案が昨秋の運営委員会で取り上げられ、テーマの検討やパネリストの人選などの準備を進めることができたのは、まさに幸運としかいいようがない。日本近代文学会は1700名以上の会員を有する大規模な学会であるが、パネリストの方々はもちろんのこと、当日、小雨の降る中を会場に足を運び、閉会までの長時間、席を立たずに熱心に聴いて下さった多くの参加者に、この場をお借りして感謝申し上げたい。

パネリストの発表では、まず、ASLE-JAPANの会員である結城正美氏(金沢大学)が、「環境と言葉—日米比較環境文学研究の立場から」と題して、エコクリティシズムの定義や概要を説明され、さらに比較研究的アプローチの課題や問題点を提起後、具体的な作品として森崎和江に関する考察を实践された。環境文学という研究方法が日本文学研究ではまだ市民権を得ていない現状を踏まえ、プロジェクターを用いながら環境文学の意義や現状、検討事項などを周到に展開された。一義的な報告ではなく、方法論をめぐる客観的視点に立った、慎重かつ大変わかりやすい発表であった。前日の台湾での学会発表後の帰国というご多忙な中、結城氏によって、国際的に伸展しつつあるエコクリティシズムからの提言の機会を得られたことは、日本近代文学会にとっても大きな収穫であった。

次に、日本近代文学会会員である藤森清氏(金城学院大学)が、「風景と所有権と文学」と題して、日本近代における〈風景の発見〉を、これまでにない切り口から分析された。オランダ風景画の誕生における社会経済的要因が、当時の農民自身の土地所有率の高さに起因するというスヴェトラナ・アルパースの指摘など、風景の誕生と土地の私的所有権、経済的環境との関連を踏まえ、国木田独歩「武蔵野」や徳富蘆花「自然と人生」などが、土地の私的所有権を含む明治民法施行後に発表されていることに着眼して分析された。特に「武蔵野」において、経済的権利主体を回避した身振りによって武蔵野が〈風景〉として成立するという構図の指摘は、現代における環境と文学を考える上でも大変参考になる視点であった。

小休憩を挟んだ後、環境哲学の分野から河野哲也氏(立教大学)が、「環境・動物・変身—ギブソン心理学とロートレアモン伯爵—」と題して、プロジェクターを用いながら、人間の心が環境と依存関係にあり、生態学的存在であることを論じられた。私的所有概念による近代的な内面・主体の成立批判、動物と環境との相補的關係をアフォーダンス理論によって提示したギブソン心理学の概略、身体と環境とがひとまとまりの行動システムであることの指摘などを展開し、最後にロートレアモンの「マルドロールの歌」で文学における生態学的なアプローチを試みられた。河野氏は、近年、『環境に広がる心—生態学的哲学の展望—』(勁草書房 2005)、『〈心〉はからだの外にある—「エコロジカルな私」の哲学』(NHK ブックス 2006)などで、近代的な主体というドグマを再検討し、心と環境との生態学的な関係を提唱されており、環境文学研究にとっても多分に示唆的である。ご本人の気さくでよどみない語り口も、従来の哲学のイメージを一新する魅力的なパーソナリティーとの印象を受けた。

最後は、日本近代文学会会員である西田谷洋氏(愛知教育大学)が、「認知環境とアフォーダンス」と題して、アニメーション「MACROSS ZERO」を例にあげながら、環境における人間の認知作用や表象の問題を直接視覚性という観点から論じられた。アニメーションの具体的な場面を一つ一つ取り上げながら、認知作用の可変性や場における運動としての心を生起現象として捉え、論者側の表象に対するアプローチの限界性を指摘された。エコクリティシズムが直接視覚性を測る1フレームとして機能せざるを得ない点や、理想化やユートピア志向をはらんでいるのではないかといった指摘は、常に私たちが方法論に自覚的であらねばならないことへの警鐘としても受け止められた。

休憩後、1時間20分ほど、パネリスト相互の意見交換や、フロアーを交えた質疑応答が行われた。話題が多岐に

わたっていたため、ディスカッションのテーマを絞ることが難しく、〈環境〉を媒介とした文学研究の議論が深められたとは言い難い。討議が散漫のうちにタイムアウトとなり、着地点を見いだせなかったことは、ひとえに司会の1人として進行係を務めた筆者の責任である。シンポジウム終了後には、研究方法としてどういった点が新しいのか、環境問題に直接リンクする議論もしてほしかった、といった、いくつかの批判や要望をいただいたが、企画立案した筆者としては、今後の研究スタンスにもかかわる貴重な意見として真摯に受け止めていきたい。

シンポジウムは消化不良の感もあったが、それだけ〈環境〉による文学研究に未着手の部分が多いことの証左だったともいえよう。日本近代文学研究に〈環境〉という視座を据えられたことは、環境問題意識の高まる現代において、遅まきながらも、ひとつの先鞭がつけられたのではないかとも思われる。これを機に、日本近代文学研究の領域にも、〈環境〉による周辺領域との横断的なアプローチがより意識化されてくることを望みたい。

現代ネイチャーライターの横顔 (9) 英国詩人ジョン・クレア

鈴木蓮一 (熊本大学)



JOHN CLARE.

*Portrait of John Clare from a painting
1840s*

英国 Peterborough Museum
ウェブサイトより

わが国において John Clare (1793-1864) はあまり知られていなかったが、近年エコロジーと環境保護の観点からも彼の作品が見直され、評価が高まりつつあります。1991年、Jonathan Bate は *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition* において、'Pastoral Poesy'、'The Eternity of Nature'、taste についての散文をとりあげ、クレアのロマン派のエコロジーがラスキンの反ベンサム派経済学と一致していると説き、さらに 'Remembrances' と日記に言及し、〈進歩〉が土地を変貌させたことに起因するクレアの喪失感をワーズワスのそれと比較しています。1995年、'Clare and Ecology' を特集した *The John Clare Society Journal* で、Bate は 'The Rights of Nature' と題する論文において、R. P. Harrison の「英文学の規範による、この偉大な詩人 (クレア) の恥ずべき過小評価」という評言を紹介し、さらに 'The Lamentations of Round-Oak Waters'、'The Lament of Swordy Well'、'The Fallen Elm' の特長を論じながら、「人間の権利」と「自然の権利」は同一の広がりをもつものであり、共に依存し合うものであるという考えをクレアがもっていたと主張しています。また詩人シェイマス・ヒーニーは *The Redress of Poetry* において、これら二つの嘆きの詩の「社会的抗議と芸術的努力は完璧な段階にある」と称賛しています。2000年、Bate は *The Song of the Earth* において、'The Fallen Elm' と書簡を分析し、クレアが自由と平等という人間の権利を自然界にまで拡大し、すべての生き物と自然界にたいし友愛を表わしていると指摘しています。また James McKusick は *Green Writings: Romanticism and Ecology* で、'The Lament of Swordy Well' について、「ソーディ・ウエルの声は、自然の存在物は英国の慣習法の根底にある公民権に類似する権利をもっているという、知性的に進歩した考えを提出すると同時に、自らの破壊を引き起こす利己的な動機を非難している」と解釈していて、クレアが「大地自身は環境保全上の不満の種を取り除く合法的権利をもつべきである」と提案した最初の詩人であると断言しています。2001年、Joy A. Palmer 編 *Fifty Key Thinkers on the Environment* (須藤自由児訳、『環境の思想家たち』、みすず書房) の中で W. John Coletta は、クレアの自然誌的な詩が「年数を経て成熟した生態学的コミュニティの価値として記述するもの、つまり生産・変化・量よりも保護・安定性・そして質を優先して最適化する、そうしたコミュニティの傾向性」と「今日われわれがポストモダンの関係と呼ぶかもしれないような、自然のシステムの作用」を鮮明に描いている点で、クレアは環境思想史において重要であると述べています。

私見では、生き物と自然の事物を、自己の観念や理想を人間中心主義的に表現するための道具としてではなく、それらの個々の対象自体がもつ固有の性質と価値を表現するために、実際に存在するものとして描出していることがクレアの自然詩の特質です。この特質がクレアを、「政治経済の根本的な物質的基礎は金銭、労働、生産ではなく、きれいな空気、水、土である」と説いたラスキンに先んじて、エコロジー思想をもった詩人としています。自然にたいし畏敬の念を抱く関係から自然を収奪、搾取する関係へと移る産業革命と農業革命の時代に、自然環境のもつ

経済的価値以外の多様な価値を重視したクレアの詩には、自然環境を保護し、維持すべきであるというメッセージが読みとれます。人間の食欲と「自然の権利」への侵害へのクレアの批判は、自然のもつ共生的調和と生態系の完全性についての正しい理解に基づいています。19世紀の初期に、クレアが荒地や沼沢地保存の重要性を認識することによって生態学的先見性を示したことは驚嘆すべきことです。

ところで、John Clare Education & Environment Trust は、英国政府の支援のもとにクレアの生家を買上げ、2009年までに、それを優れた国際的な環境保護教育のセンターにする計画を進めています。このセンターは、「田舎がもっている叙情的及び科学的な、すばらしい事象についての人々の知識を豊かにし、さらに環境教育のトレーニングのための創造的な基準を設定する」ことを目指しています。クレア研究の組織は、英国の The John Clare Society、The John Clare Society of North America、日本の「クレア研究会」(<http://taweb.aichi-u.ac.jp/clare-kenkyukai/>)があります。

クレアの入手しやすいテキストは、句読をつけられた入門的な R. K. R. Thornton ed., *Everyman's Poetry: John Clare* (J. M. Dent、拙訳、『ジョン・クレア詩集』、英宝社)と Jonathan Bate ed., *"I AM": The Selected Poetry of John Clare* (Farrar, Straus and Biroux)のほか、Erick Robinson and David Powell eds., *John Clare: Major Works* (Oxford World's Classics)と Geoffrey Summerfield ed., *John Clare: Selected Poems* (Penguin Classics)です。自然誌的散文についてのテキストは Margaret Grainger ed., *The Natural History Prose Writings of John Clare* (Oxford U.P.)です。

ASLE-J-Grad Journal No. 4

「環境文学キーワード集」、現在「準備中」？それとも「座礁中」？

山本洋平（立教院）

私たち院生組織は、日韓合同シンポジウム以降もウェブ上で活動を続けています。メーリングリストによる読書会は、Gaard and Murphy 編の *Ecofeminist Literary Criticism* (1998)が一段落し、次に Rachel Stein 編の *New Perspective on Environmental Justice* (2004)を新たなテキストに選んで再開します。一カ月に一章というペースで白熱した議論を繰り広げています。この成果はいずれ発表の場を求めていきたいと思っています。

さて、今回のレポートの趣旨は以上の順調な活動報告ではなく、袋小路に迷い込んでいる案件を報告することにあります。ASLE-Jのホームページには「環境文学キーワード集」という項目があり、そこをクリックすると「準備中です」と表示されるのはご存じでしょうか？他のウェブ上HPでもしばしば遭遇する「ただいま準備中です」というこのセリフをいざ返上すべく、アイディアをまとめるよう要請頂いたのが昨年夏。以来、院生の間で話し合いを進めていますが、経験不足がたたって未だ方向性さえ定まらず、事実上「座礁中」。なにしろ、対象読者は誰なのか？守備範囲をどこまで広げるべきか？文学の学術用語に絞るのか？作家を入れるのか？・・・等々、考えれば考えるほど、とてつもない作業量だと思えてきます。

打開策として、次のような方法で先行研究を整理してみることにしました。(1)巻末にグロッサリーを有している環境文学関連書籍を6冊ほどピックアップして、(2)重複頻度の高い項目から並べていき、(3)その上位項目から論述を検討してみる。ここでは、比較的手に入りやすい3冊(『ユリイカ 特集ネイチャーライティング』青土社、1996年／『楽しく読めるネイチャーライティング』ミネルヴァ書房、2000年／Lawrence Buell, *The Future of Environmental Criticism: Environmental Crisis And Literary Imagination*. Blackwell, 2005. 伊藤詔子他訳『環境批評の未来—環境危機と文学的想像力』音羽書房鶴見書店、2007年)より重複項目の上位を抜粋してみます。

『ユリイカ』(1996)	『楽しく読めるNW』(2000)	Lawrence Buel (2005)
Ecocriticism	Ecocriticism	Ecocriticism
Ecocentrism	Ecocentrism	Ecocentrism
Wilderness	Wilderness	Wilderness
Sense of Place	Sense of Place	place, placeness, non-place
Bioregionalism	Bioregionalism	Bioregionalism

Ecology	Ecology	Ecology
Ecofeminism		Ecofeminism
Nature Writing		Nature Writing
	Landscape	Landscape
Natural History	Natural History	
anthropomorphism		anthropomorphism

リストのうち単純に考えれば、すべてに共通するものは最重要語ということになりますが、「日本」における批評的文脈や最新の知見を取り入れて、斬新な情報を発信したいと考えています。

最近ますます ASLE-J の HP は充実度を増してきており、日韓シンポ予稿集やその他貴重な情報が次々とアップされています。グリーンを基調にしたデザインは学術系 HP として屈指の美しさで、文学と環境に関心を持つ人にとって、まさに貴重な窓口となっているはずです。「環境文学キーワード集」はそのメイン・メニューにあります。ですから、いち早く、しかし慎重にアイデアをまとめねばなりません。もしかしたら、この用語集プロジェクトを完遂するのは、私たち院生だけでは手に余る量かもしれません。現在「準備中です」という看板は、事実上「座礁中」なのです。このきわめて重要な仕事について、会員の皆様はいかがお考えでしょうか？

書評 スコット・スロヴィック、伊藤詔子、吉田美津、横田由理編著
『エコトピアと環境正義の文学——日米より展望する 広島からユッカマウンテンへ』
(晃洋書房 2008 年、337 頁、索引等 27 頁、4,500 円)
 佐藤 光重 (関東学院大学)

本書は副題が示すとおり、被爆地広島から核実験場ネバダ砂漠へと、国境を越えた放射能汚染を始めとする地球規模の環境破壊を問題軸に据えて論を展開する。

全論考は 22 編、扱う作家はソロー、クーパー、ホーゾーン、メルヴィル、トウェインといった文豪からホーガン、オゼキら新進のネイチャー・ライター、さらにはギブスン、バラード、ル・グインら SF 作家をも広く視野におさめる。多彩な作家群を配置しながら、各論が一貫してユートピア／エコトピア、および環境正義なる視座を扱うため、多角的でありながら驚くほど骨太な印象を受ける。

第 I 部は 19 世紀の作家を主として扱い、エコロジ的な理想のトポスたるエコトピアの言説を探りつつ、大御所作家の文学世界を 21 世紀の視点から斬新に照射する。

ジム・ターター、スコット・スロヴィックらの最新批評を収める第 II 部では、スタインベック・ミューアなどに見る西部を主題に環境正義の概念を展開する。

つづく第 III 部はエコトピア幻想を主題に据える。ここではカレンバック『エコトピア』(75 年)に見るエコロジの理想郷像を軸に、従来の文学史に見えるユートピア幻想を再定義する。

第 IV 部では、ネイチャー・ライティング研究が広めた「場所の感覚」概念を、流動的アイデンティティーや(非)場所といった視点より脱神話化し、「ヘテロトポロジー」の場所性を展望する。

論者にはレベッカ・ソルニットや ASLE-Japan で活躍する気鋭の若手研究者を揃え、この陣営だけでも圧巻だが、ここに環境正義の批評を開拓する批評家ターター、スロヴィック、さらに日米で環境文学研究の開拓者たるバートン・セントアーマンド、伊藤詔子、巽孝之らベテランを交える。

巻末に詳細な索引とユートピア／エコトピア／環境正義に関する基礎文献の解題を付す。

正義とは権力者の振りかざす武器ではあっても、文学研究ではおおよそ正面きって語ることのなかったテーマではなかろうか。かのアルド・レオポルドが次世代の倫理として土地倫理を提唱してから久しい現在、環境正義なる概念を援用して、本書はいわば文学研究のタブーに踏み込む。

**書評 高銀／ゲーリー・スナイダー／森崎和江／加藤幸子／内山節ほか著
『場所の詩学：環境文学とは何か』（藤原書店、2008）**

石幡直樹（東北大学）

2007年8月に「場所、自然、言葉——日韓環境文学の〈いま〉を考える」と題されたASLE日韓合同シンポジウムが金沢で開催された。本書はその講演、研究発表を中心として編集されている。このシンポジウムはASLE-Japanが開催する3回目の国際会議である。第1回はハワイでの日米ASLE会議（1996年）で、初めて日本の環境文学を国際的な場で紹介・検討する場となり、小説家の日野啓三や石牟礼道子の参加を得た。第2回は沖縄の琉球大学で開催され（2003年）、韓国詩人高銀、台湾のネイチャーライター劉克襄、そして現在最大の自然詩人ゲーリー・スナイダーを迎え、アジア地域の環境文学を初めて意識する機会となった。

4章からなる本書の第I章「日本のまなざし」は、自然（じねん）の概念から非近代的知、短歌の自然詠、そして『もののけ姫』までの多方面から日本の環境批評の現状を問う。内山節は人間の限界（死）を見つめることを忘れた「近代化」を批判し、結城正美は庶民の視線で伝統知と向き合うことの重要性を指摘し、ウルズラ・K・ハイザは宮崎駿のエコ・ノスタルジアと高畑勲のポストモダンの自然を峻別する。ここでは日本の自然の奥深さを再認識させられる。

第II章「韓国のまなざし」では、まず高銀が環境は人間の概念であるという厳粛な定理を再確認し、韓国の具体的な環境悪化を例示しながら資本主義イデオロギーを超える「精神のエコロジー」を提唱する。そして、金芝河の孤独な共存という逆説的原理、韓国民話『沈清伝』などに見られる生命の象徴としての水とこども、李清俊作品の自己充足的現実を体現している木についての考察が続く。韓国の環境文学の独自性と普遍性が同時に浮き彫りになる。

第III章「ゲーリー・スナイダーからの／へのまなざし」は、シンポジウム後の立教大学でのスナイダーの講演「場所の詩学」と対話に加えて、アジアの研究者によるスナイダー作品の検証からなる。土壌、植物、雨について語ることが「場所の詩学」の原理という彼に、日本の名字に込められた「場所の感覚」を教えられてとまどう日本人は少なくないのではないか。続く、韓国でのスナイダー受容を詳述する3編は貴重である。また、個人的洞察をもたらすアジアに向かうまなざしがアメリカ文学にあるという山里勝己の指摘や、自然に同化しようとする強靱な精神力がスナイダーの「男らしさ」という加藤幸子の洞察も新鮮だ。

第IV章「明日へのまなざし」では、場所ごとに固有の〈エコ〉があること、我々は生かされているということの再認識、環境批評もまた生態地域主義に基づくこと、文学という表象芸術には身体や自然というノイズが満ちていることが的確に提示されて結びとされる。アメリカ生まれの環境批評の種子が、人や風や水に運ばれ、極東を含む世界各地でその土地にあった「場所の詩学」を着実に育んでいることを教えてくれる貴重な一冊と言えるだろう。

**書評『草が生い茂り、川が流れる限り—アメリカ先住民文学の先駆者たち』
西村頼男 開文社出版 2008年**

小沢奈美恵（立正大学）

本書では、19世紀半ばから20世紀にかけて出版活動を行った先住民作家の人物と作品の紹介が行われている。この時期の先住民を扱った歴史書は出ているが、文学を紹介したものとしては、他に類例がない。現代の先住民作家たちは徐々に紹介されつつあるが、その先駆者たちとして、西部開拓によって先住民文化が衰退していく時代を証言する先住民の声を甦らせ、文学史に新たな視点を提供しているという点で、大変貴重な労作である。19世紀初頭から20世紀に亘る歴史の中で、強制移住法、メキシコ戦争、破られた数々の条約、ドーズ法、市民権の獲得など、歴史書で知る事象や条約の問題を先住民の視点から、血肉の通った現実として捉えることができるだろう。

扱っている作家は、チャールズ・A・イーストマン（サンティ・スー族 1858-1939）、ダーシィ・マクニクル（クリー族の血を引く白人との混血 1904-1977）、ジョン・ロリン・リッジ（チェロキー族 1827-1867）、セアラ・ウィネマッカ（パイユート族 1844?-1891）、モーニングドローヴ（カナダのオカナガン族とアメリカ西部のコルヴィル族

1884? - 1936)、ジョン・ジョセフ・マシューズ (オーセイジ族とフランス人の混血 1894-1979) の 6 人である。イーストマンとマクニクルは、著者が編集した『ネイティブ・アメリカンの文学』(ミネルヴァ書房 2002 年) でも紹介されている。

これらの作家は、政府の同化政策を半ば受容し、白人と先住民の間の橋渡しをしながらも、先住民文化が白人文化に吸収されようとする中で苦闘しながら、アイデンティティを確立しようとした人々である。先住民の市民権と自治の確立、保留地制度への批判、資本主義的価値観と植民地化のために利用されたキリスト教への懐疑など、作家たちの主流文化への適応のなかで起こる苦悩が伝えられている。彼らは、仲間の先住民から見れば裏切り者とされることと裏腹な、危うい境界線上で生き残りをかけてバランスを取っている。以下に各作家について、本書の要旨を簡単に紹介することにする。

イーストマンには、本書の 3 分の 1 が割かれている。イーストマンは西欧的な高等教育を受ける機会に恵まれ、医者となり、文明化政策を受容しつつも、白人文明に疑問を抱いていた。イーストマンの父は、フォート・ララミ条約への不満から起きた、ミネソタ・スー族の蜂起で捕らえられた後、リンカーン大統領の裁量で絞首刑を免れている。また、イーストマン自身も、ゴースト・ダンス教とウーンデッド・ニーの虐殺の直後、パインリッジでスー族の医師として働き、部族のために貢献した。その後も年金支給交渉を行ったり、先住民学校の医師をしたりしながら、その間に白人による先住民への狡猾な搾取や不正を目撃した。アメリカ・インディアン協会 (SAI) を創設し、市民権獲得運動を推進し、インディアン対策局の査察官として先住民の苦境を視察もした。彼の著作は、キリスト教や、自然破壊を行う文明も批判していると言う。彼が、レッド・クラウド、クレイジー・ホース、シティング・ブルなどの伝説化した先住民の英雄を同時代の先住民の視点から伝えていることも大変貴重と言えるだろう。

マクニクルもイーストマンの跡を継ぐように、連邦政府のインディアン対策局の行政官として、また文化人類学者として先住民の自治権の確立のために生涯を捧げた。先住民の伝統に回帰し、キリスト教、資本主義、全寮制学校、狩猟の法律、西部フロンティアの理想化、西欧的個人主義、ダムによる自然破壊などに批判を加える点でイーストマンのテーマを継承している。

リッジは、強制移住と領土拡張時代を体現する作家である。父親は、強制移住法賛成派として暗殺されたジョン・リッジで、息子のリッジ自身も進歩や「明白な運命」を信奉し、暗殺の手から逃れるためにゴールドラッシュ時代のカリフォルニアに渡り、ジャーナリストとなった。しかし、そのリッジが描いた小説『ホアキン・ムリエタ』は、メキシコ人の義賊を主人公とするものであった。メキシコ戦争後、アメリカ人から差別的行為を受け、兄弟を殺されたムリエタが、アメリカに対する復讐を誓い活躍するというもので、メキシコの立場から描いた点にリッジの心の葛藤が反映されている。

ウィネマッカは、パイユート族の存亡をかけて、通訳として白人と交渉を行った。彼女の著作では、先住民のために支払われた政府の公金が白人の担当官に横領される現実やパイユート族に対する虐待などを糾弾している。モーニングドーフは、白人の描いた小説を、先住民の観点から書き直すつもりで、白人と先住民との混血のテーマに挑んでいる。マシューズの作品にも、混血であるために、二つの文化、進歩と伝統などの狭間で引き裂かれる人物が描かれている。

著者の筆致は客観的であるが、フロンティアの西進とアメリカの発展の陰で土地・文化・伝統・言語などを失っていった先住民たちを代弁して、上記の作家たちが、生き残る手段として白人文明を受容し、先住民の地位向上のために努める姿が、切々と伝わってくる。歴史書を読んだだけでは伝わらない生々しい西部の記録に目を開いてくれる書である。

◎.....◎事務局より◎.....◎

◇ 2008 年度 ASLE-Japan / 文学・環境学会全国大会を九州で開催します。

2008 年度日本アメリカ文学学会全国大会 (会場: 西南学院大学) 終了後に開催を予定しています。

2008 年度年次大会

日時 10月12日(日)~14日(火)
場所 国立大学研修九重共同研究所(大分県玖珠郡九重町)

スケジュール

第1日 10月12日(日)

18:00-20:00 (移動, 夕食は車内)
20:30-22:00 懇親会

第2日 10月13日(月、休日)

8:00-9:00 朝食
9:00-10:00 役員会
10:00-12:00 東アジアパネル(台湾、日本、香港)
12:00-13:00 昼食
13:00-17:00 フィールドトリップ(阿蘇)
17:00-17:30 総会
17:30-18:30 夕食
18:30-19:30 研究発表
19:30-21:00 招待講演

第3日 10月14日(火)

8:00-9:00 朝食
9:00-10:30 ラウンドテーブル
11:00-13:00 (移動-福岡へ)

個人発表

大野瀬津子(九州工大)ほか1名。

東アジア環境文学パネル

若松美智子(東京農大、日本)
Professor Shih-huah Chou (National Sun-Yat-Sen University, Taiwan)
Professor Won-Chung Kim (Sungkyunkwan University, South Korea)
Professor Chun Lin (Hong Kong Baptist University, China)

特別講演

Karen Colligan-Taylor (Professor Emeritus, University of Alaska)

ラウンドテーブル

「水俣、広島、ニュージャージー—汚染の文学と言説をめぐって」
伊藤紹子(松山大学)、結城正美(金沢大学)、松永京子(日本学術振興会)


事務局

県立新潟女子短期大学 小谷一明
 〒950-8680 新潟県新潟市東区海老ヶ瀬 471 番地
 研究室電話 025-270-3351 / ファックス 025-270-5173
 E-MAIL: kodani@da2.so-net.ne.jp

Niigata Women's College
 Kazuaki Odani
 471 Ebigase Higashi-ku Niigata-shi Niigata JAPAN 950-8680
 TEL: +81-25-270-3351 / FAX: +81-25-270-5173
 E-MAIL: kodani@da2.so-net.ne.jp

◆会費納入のお願い

会費未納入の方は、至急、下記郵便口座へお振り込みください。(一般 5,000 円、学生 2,000 円)

	口座番号 01300-0-93821 加入者名 文学環境学会
--	-----------------------------------

※ ** 寄贈図書 ** ※

次の図書を学会に寄贈していただきました。お読みになりたい方にはお貸ししますので、事務局までご連絡ください。なお、送料はご負担ください。

- ・『エコトピアと環境正義の文学-日米より展望する広島からユッカマウンテン』スコット・スロヴィック、伊藤詔子、吉田美津、横田由理、晃洋書房、2008.
- ・エコクリティシズム研究会 「会報」No. 4、松山大学研究センター・伊藤研究室、2008.

【編集後記】

ニューズレター24号は、ASLE-J 関係の大きな大会の狭間に発行することもあって、会員諸兄姉から寄せられた「随想」欄を充実させた。知っているようで知らなかった会員諸氏の隠れた一面を垣間見せていただいたようで、また、それぞれの立場から多彩な研究・活動をおこなっていらっしゃることも知って、大会報告記事が盛りだくさんの号とは一味も二味も違った内容になったのではないかと考えている。早いもので、山城、林、村上の体制で出発した現編集委員会も本号の編集とともに任期の2年を終えることとなる。この間の皆様方のご協力に改めて感謝申し上げるとともに、新体制のもとでのニューズレターの大きな飛躍をお祈りしたい。(K.M)

【発行】

ASLE-Japan/文学環境学会
 代表 生田省悟
 事務局：県立新潟女子短期大学 小谷一明
 〒950-8680 新潟県新潟市東区
 海老ヶ瀬 471 番地
 研究室電話：025-270-3351,
 FAX:025-270-5173
 E-MAIL: kodani@da2.so-net.ne.jp



【編集】

編集代表 村上清敏
 〒920-1192 金沢市角間町
 金沢大学文学部（総合教育棟）
 Tel: 076-264-5827, Fax: 076-234-4170
 E-mail:melville@kenroku.kanazawa-u.ac.jp